外国人のジェスチャー：習得研究に関する方法論序説

木　田　　剛

外国人はことばを補うのに腕や手を使って話します。この習慣はわれわれ物静かな英国紳士にとって，はしたない […]，皆さんは，話していることを手で表現する必要はありませんが，もしどうしても使うなら，まったく軽くかつ優雅にすべきであり，決してこぶしをテーブルの上に振り下ろしたり，手と手を叩いて音を立てたり，指で話し手を突いてはいけません。指をさすことも避けるべき癖であり，とくに肩越しに親指で指すことは野暮な振る舞いです。つまるところ，[…] 皆さんは，振る舞いにおいて，あまり激しすぎてはいけないのですし […]。[1]
Jane Aster (1860), *The habits of good society: A handbook for ladies and gentlemen*, pp. 284-285.

1. はじめに

本稿は，外国人の談話理解とジェスチャーなどの視覚情報の関係を扱った前稿（木田，2012）に引き続き，外国人によるジェスチャー習得研究のための理論的な背景と方法論を議論する。ジェスチャーは文化間で異なる表現である。しからば，外国人が異文化との接触に応じて，第二言語を習得するように，自分のジェスチャー表現をも変化させていくと仮定できよう。そこからジェスチャーの習得プロセスを解明するという課題が引き出せる。しかし，この種の研究は前例に乏しく，未知なる領域に足を踏み入れるには方法論が必要である。したがって，本稿は，この研究課題について理論的な位置づけを行うとともに，実証研究を行うために必要な分析方法を整理することを目的とする。

まず，第 2 節では，ジェスチャー研究と習得研究の関係について述べた後 (2.1)，ジェスチャーに関する先行研究を概観する（2.2)。続く第 3 節では本研究のデータに触れて，発話の「能弁性」により分析を限定している理由を説明する。第 4 節では，主に収録された映像音声データに依拠したジェスチャー行為の類型を提示することで，具体的な分析方法を示す。類型について，形態的側面（4.1)，動態的側面（4.2)，意味的・時間的側面（4.3）の 3 つに分け

て，それぞれの特徴や記述上の留意点などを概説することにより，実証的分析の準備を行う。最後に本稿の内容をまとめながら，今後の研究方針を示す（第5節）。

2. ジェスチャー習得の理論的背景

外国人は，ことばだけでなく，その起ち居振る舞いが現地人と異なることから，歴史の中で嘲笑や風刺の対照にされてきた。また，奇妙な挙動を嘲るのに「外国人」あるいは「外人」と揶揄することもあった[2]。たしかに，外国人の身振り手振りは一見特異である。たが，この特異性の中に学術的価値を見い出して，行われた研究もある。18世紀の欧州啓蒙時代の全哲学者を巻き込む大論争に発展したCondillac（1746/2002）のジェスチャー言語起源説に関して，Diderot（1749-51/2000: 93）は，言語を話さない盲人や外国人の身振りの中に答えを求めるべきであると主張して，『盲人書簡』を著した。19世紀，ナポリで遺跡調査をするドイツ人研究者[3]が食器や花瓶の上に描いてある人物図の解釈に苦労していると聞いた現地の考古学者Andrea de Jorio（1832/2000: 239-240）は，ナポリ特有の身振りが外国人にとってわかりにくいことが原因であると考え，現地人のジェスチャーの記述に取り組み，ジェスチャー研究史上初の民族誌を残すことになった。David Efron（1941/1972）は，Franz Boas指導のもとで博士論文を執筆し，師の反人種論を証明すべく，ニューヨークのイタリア人とユダヤ人移民の比較・観察を行い，ジェスチャーの世代間の違いを見出すことで，人間の非言語コードが取り巻く文化的環境に影響されることを論証した。ジェスチャーの最小単位「動素」（kineme）まで身振り手振りの分析を行う「動作学」（Kinesics）を考案した米人類学者Birdwhistell（1952）も，その出発点はバイリンガルや外国人が，話す際に非言語による調整機能を変化させていることに気付いたからであった。このように，外国人ジェスチャーの観察から，革新的な研究が生まれている。本研究においては，外国人のジェスチャーに着目することで，これが習得されるものなのか，またその場合，どのような習得過程を辿り，どのような要因で習得が制限されるのか，言語とジェスチャーの違いはあるのか，などの問題に取り組みながら，外国人による言語習得とはどのようなものであるかという，応用言語学における古典的な設問を再考することも視野に入れている。

2.1.　学習，獲得，習得

第二言語習得の課題の一つには習得過程の記述がある。一般に，成人が新しいことばを学ぶ際に，「学習」（仏 apprentissage/ 英 learning）と「獲得」（英仏 acquisition）という二種類の知的活動が混在する。前者は外国語教室などのように，「制度的な環境」（milieu institutionnel）で行われる活動であり，「宣言的知識」や「手続的知識」を蓄積するための訓練が「意識的に」行われる。その一方で後者は，子供の言語獲得のように，とくに制度化されたわけでない「自然な環境」（milieu naturel）で行われるものである。一般に，「学習」と「獲得」の２つの側面を合わせて，日本語では「習得」，フランス語では「appropriation」（英語では「acquisition」）の用語が使われる。成人が第二言語を習得する時，大部分の文法や語彙は，宣言的知識の理解を促すことで「学習」されるものであるが，イントネーション，会話ターン管理などを含む「会話能力」（conversational competence），談話構造，発話行為に関わる「語用能力」（pragmatic competence）は，宣言的知識による理解が困難であることから，自然に「獲得」されると考えられる。

獲得と学習との間の大きな違いは，習得作業における意識の度合いである。一般の成人の第二言語習得においては，習得意識を伴う学習と，これを伴わない獲得が混在している。Bange（2006）によると，子供の言語獲得は，世界知識を表現できるように，言語の構造を再構成すること（第一記号化作業 sémiotisation au premier degré）であるが，成人の場合は，これに加えて，第一言語と第二言語の違いに対処する必要がある（第二記号化作業 sémiotisation au second degré）。したがって，厳密にいえば，あらゆる第二言語習得は，たとえ「自然な環境」にあったとしても，多少の意識的な習得作業を伴う，「二重記号化作業」（double sémiotisation）であるといえる。このような観点から，認知言語心理学や脳言語学では，意識的な習得（学習）の対象になりうる明示的知識（explicit knowledge）と，意識的な習得が困難な暗示的知識（implicit knowledge）とに分けられる（Paradis, 2000）。

おそらくジェスチャーは，語用能力のように，自然に獲得される暗示的知識に属する。一般にジェスチャーは，音節言語と異なり，シニフィエとシニフィアンとの恣意的な関係が認知されておらず，社会的な慣習としての記号体系が記述されているわけではない。しかしながら，ある社会文化共同体に属する成員が使用するジェスチャーには，ある種の規則性が認められる。かつて Sapir

（1927/1954: 556）は，ジェスチャーを「どこにも記述されていず，誰も知らない，すべての者に理解される精緻で秘密なコード」，あるいは「精緻な社会的伝統による匿名の創造物」と呼び，言語や技術や宗教と同列にみなしながら，社会における人間の非言語行動を司る「法則」があることを示唆した[4]。ジェスチャーは，長い歴史の中で形成され，しばしある地理的領域内に集まった人間集団の記号的かつ実践的産出の比較的まとまった体系[5]なのであり，共同体における言語文化の一翼を担っていると言える。

成人による異文化ジェスチャーの習得を考える時，その知的活動は第二言語習得における「二重記号化作業」とは異なると推察される。一般に，語学教師が受入社会のジェスチャー文化を体系的に教えることはない。Birdwhistell（1952, 1970）も示唆したように，ジェスチャーは，おそらく対象を意識しながら習得するものではなかろう。意識とは主観的な経験であることから，実際にジェスチャー習得の起こるレベルが，無意識なのか前意識なのかを実証することは容易ではないが，少なくとも外国語教室で学習する外国語や外国で身につける第二言語よりは，意識を伴わずに習得されているものと推測される[6]。Ekman & Friesen（1969/81: 65）も，個人による受入社会・文化との接触にともなう観察や社会経験のみにより，ジェスチャー習得が行われると述べている。

このように考えると，ジェスチャーの習得過程を記述することで，言語文化の純粋な自然習得モデルを提示できると仮定される。このモデルは，宣言的知識で教育・学習されていない暗示的言語知識のすべての領域における習得研究と関連がある。これらの知識が制度的環境や自然的環境でどのように習得されているか理解するための糸口となると期待される。また，語用能力が喪失されていく言語障害の問題（たとえばアルツハイマー病患者のコミュニケーション能力の問題）に対しても，解決のヒントを与えてくれるかもしれない。さらに，このような拡張された言語習得モデルから，現代社会の中で文化がどのように形成され，維持そして変化していくのかという文化ダイナミズムを考察することも，本研究の射程に入れることができよう。

2.2. 現代ジェスチャー研究の概観

現代におけるジェスチャー研究を概観するにあたり，Freedman（1975）が提案した非言語研究の 5 つの分類に即して整理してみよう。

1）「個別表現モデル」：意識的・非意識的に関わらず，個人の動作や顔の表

情の特徴の記述・分析

2)「対面状況モデル」：対面状況における相互行為の調整に関わる非言語の特徴の記述・分析

3)「民族学モデル」：フィールドワークにもとづいた特定集団の非言語行動の記述・分析

4)「情報処理モデル」：認知や情報処理に関連する非言語の特徴の記述・分析

5)「舞台振付モデル」：筋肉や骨格の動きに特化した身体動作の特徴の記述・分析

個別表現モデルは社会心理学で，情報処理モデルは認知心理学で主に扱われており，両領域とも研究は盛んである[7]。舞台振付モデルは，映画の先駆けとなった 19 世紀の Muybridge や Marey の連続写真に触発された，さまざまな人間活動を時空間の中に位置づけて記述するものであり（たとえば Bouissac, 1973, 2010, 2012），近年ではモーション・キャプチャを活用した研究がある。一般言語学は，主に民族学モデルに関心を寄せてきた（Boas, 1891, 1966; Sapir, 1927; Buyssens, 1956; Mounin, 1973）。言語人類学者にせよ構造主義言語学者にせよ，聴覚障害者の手話（Stokoe, 1960）や，修道院の修道士や少数民族による視覚言語を記述した研究が多く残されている[8]。かつてレトリックで扱われていた政治演説のジェスチャーを研究する言語学者もいるが（たとえば Calbris, 1989, 1990, 2003），政治家を一種の「エスニック集団」とみなせば，これも民族学モデルに属すると言えよう。対面状況モデルも言語学，とりわけ社会相互行為の分析に重きをおく社会言語学や言語人類学，コミュニケーション民族誌学（あるいは人類学，Winkin, 2001）においても，近年ジェスチャーが分析に取り込まれている。この研究は 60 年代以降に盛んになった「ノンバーバル・コミュニケーション学」（Ruesch & Kees, 1953; Argyle, 1967, 1969, 1975 など）や Goffman（1967, 1974 など）のミクロ社会学の延長上にあり，会話分析に携わる研究者がジェスチャーを取り上げている[9]。ここまで挙げた研究の中で，外国人のジェスチャー習得の解明を目指した研究はほとんどない。

言語学における近年の傾向を挙げると，以下のようになる。

1)「マルチモーダルモデル」：発話とジェスチャー産出の相関関係を科学的に記述しようと試みるもので，Birdwhistell の動作学，Bolinger（1946, 1980）や Abercrombie（1955, 1968）そして Fónagy（1983）らのイン

トネーション研究，Condon & Ogston（1966, 1967, 1971; Condon, 1980, 1984）の「相互行為同調論」（interactional synchrony）などをしばし学術ベースにおく研究[10]，

2) 「談話分析モデル」：ジェスチャーを，連結性と結束性（McNeill & Levy, 1993; McNeill, 2001; Contento, 1998, 2002 など），焦点化や列挙（Guaïtella, 1995, 1998, 1999; Müller, 2003; Morel & Khaldoyanidi, 2004），テーマ・レーマ構造（Bouvet, 2001; Kida & Faraco, 2004, 2009），談話マーカー（Calbris, 2002; Juven & Colletta, 2002）をはじめとする，談話構造の視覚的表出とみなす研究，

3) 「発話言語学モデル」：ジェスチャーを談話における意味，統語，語用レベルの補足情報（Kendon, 1993, 2004; Kleiber, 1998; Siblot, 1998; Bouvet, 2001; Ferré, 2002; Kida, 2002; Kida & Faraco, 2011）あるいは間主観性の発話（co-énonciation: Morel & Bouvet, 2001; Bouvet & Morel, 2002; Maury-Rouan, 2002; Morel, 2004）ととらえる研究。

このように，現代のジェスチャー研究は，社会相互行為や談話，発話文の産出の認知プロセスの中でジェスチャーの位置付けを行う傾向にある。これらの研究は, 必然的にジェスチャーの社会的機能あるいは談話機能の記述であるが, コミュニケーション文化としてのジェスチャーの成立や変化に関して，説明を与える可能性に乏しい。この点を修正し，未解決の課題に取り組むことが，外国人によるジェスチャー習得研究の出発点である。

3. 分析の枠組み

ジェスチャー習得研究を進めるには, 分析ツールが必要になる。前稿（木田, 2012）では談話理解に関連するジェスチャーを主に扱ったが，本稿では外国人のジェスチャー表現に焦点を絞り，後の数量分析や文脈分析を可能にする分析方法を提案してみたい。このため，前稿で扱ったコーパスに含まれるすべてのジェスチャー表現を網羅的に観察したあと，先行研究に表れる分類に照らし合わせながら，新たな分類法の提示を試みる。以下，そのコーパスについて触れる。

3.1. データ

本研究の分析対象は，日本人 12 名を中心とする計 16 名の外国人（日本人

の他にはスペイン人，アルゼンチン人，アメリカ人，デンマーク人が参加者）とフランス人が 2 人 1 組で行ったフランス語の会話をビデオ収録した音声映像データ（約 8 時間あまり）とそれを記述した 420 ページのコーパスである。会話パートナーは主にネイティヴ話者であるが，自国以外の外国人の場合もあった。収録はプロヴァンス大学（フランス）の無音室で行われた。参加者は，自由会話と自国のレシピを紹介するというテーマ限定の会話の 2 種類の会話を行った。一般に，自由会話では，非ネイティヴが聞き手に終始するおそれがある。これを避けるために，非ネイティヴが社会生活においても，しばし遭遇する後者の会話も行うように提案したが，これは参加者ができるだけ日常生活に近い自然な状況で積極的に発話行為を行えるようにとの配慮からである。レシピ会話では，説明する行為と聞き出す行為の両方が行われ，さらに相手の見える状況（対面）と見えない状況（非対面）でも行われた。データの詳細は以下の通りである。

1) 対面レシピ説明：1'22"2
2) 対面レシピ聴取：1'14"23
3) 非対面レシピ説明：1'28"57
4) 非対面レシピ聴取：1'22"57
5) 自由会話：1'31'57

3.2. 能弁的談話と非能弁的談話

本稿のエピグラフにもあるように，外国人はジェスチャーを多用すると一般に思われている。しかし，実際のところは不明である。たとえば外国語初心者は，話すことばを思いつかない時に，それに代わって手振りで表現する—「コミュニケーション・ストラテジー」—傾向にあるので，ジェスチャーの頻度は高いかもしれない。これに対して，談話能力の高い非ネイティヴ話者は，概念を「言語化」（Levelt（1989）の言う formulation）する困難に陥ることが少ないので，談話を補足するジェスチャーを多用するかもしれないが，初心者より手振りを多用するか否かは定かでない。たとえば，受入社会が地中海地方のようにジェスチャー頻度の高い文化であるとすると，文化習得の進んだ非ネイティヴ話者がジェスチャーを多用することは考えられる。

方略的なジェスチャー（strategic gestures）の研究は，これまでも第二言語習得の分野において行われてきた（たとえば Gullberg, 1998b）。コミュニケーション問題に際して「非能弁的」な談話（dysfluent discourse）に及ぶ時，

話者は自ずと方略的な（stratégique）行動を取り，一般の非言語行動とは異なる特異なジェスチャーを行う傾向にある。しかしながら，方略的なジェスチャーは，外国人による受入社会のジェスチャー文化の習得を検証しようとする本研究とは主旨が異なる。むしろ，流暢に談話が行われている際に，自然に産出される視覚音声メッセージ — 「能弁的」（fluent discourse）な談話 — を主な分析対象とし，その中の発話とジェスチャーの関係を取り扱う方が，本研究の方針と合致している。

しかしながら，能弁的談話と非能弁的談話とを区別するのは，実際に容易ではない。たとえば，話者がポーズを意図的において，ジェスチャーを通してレトリック的にメッセージを伝えることがあるが，これに見られるように，ポーズが非能弁性の絶対基準であるとは限らない。また，非能弁性の兆候の一つである同語反復も，コミュニケーション問題であることもあれば，談話におけるある部分の強調という，話者のコミュニケーション意思の表れである場合もある。本稿では，以下の基準に照らして，談話の非能弁性を定義する。

1) 話者が単語を思い出すために聞き手から視線をそらす時
2) （反復も含めて）一単語，あるいは一表現だけの文が意味交渉につながる時
3) 話者がポーズフィラーや発話の乱れと同時にジェスチャーを使用する時
4) ジェスチャーが「comme ça このように」などの近似表現をともなう時
5) ポーズと共起するジェスチャーにレトリック的価値を見出せない時

本研究では，これらの基準をもとに，ビデオに収められた音声映像データを繰り返し視聴しながら能弁的な談話の部分を選び出し，その際に使用されるジェスチャーを主な分析対象にしている。

4. ジェスチャーの分類

ジェスチャーを分類することは，本研究の至上目的ではないが，習得経路を明らかにするためには，便宜上，ジェスチャーの類型化は必要である。類型は，話者の行動の特徴を客観的にとらえ，比較や数量化を通して，ジェスチャー習得状況を明確にすることを可能にする。以下，前述のコーパスからジェスチャー表現を網羅的に抽出し，さまざまな角度から分析を行った結果，以下の三種類の類型を提案する。

1) 形態的類型

2)　動態的類型
3)　意味的・時間的類型

4.1.　形態的類型

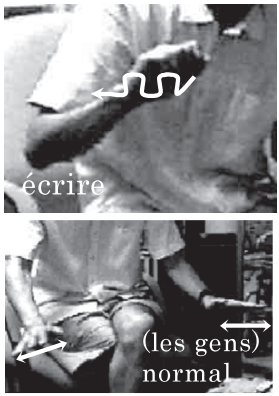
これまで多くの形態的分類が提案されてきたが（詳細は Kida, 2006），本稿では主に Efron（1972），Ekman & Friesen（1969），Cosnier（1982），McNeill（1992）の分類をもとに，本研究のコーパスに照らし合わせて，独自の分類法を提案する。

大別	種類	略語
概念的	具象ジェスチャー	Ic（iconic gesture）
	動作ジェスチャー	K（kinesic gesture）
	修飾ジェスチャー	M（modifier gesture）
機能的	ビートジェスチャー	B（beat gesture）
	談話ジェスチャー	Id（ideographic gesture）
その他	指示ジェスチャー	D（deictic gesture）
	慣用ジェスチャー	E（emblem）
	ジェスチャーミス	S（slip of hand）

表 1：ジェスチャーの形態的分類

この分類は前稿ですでに示されたが，ここではより詳細な説明で補足する。

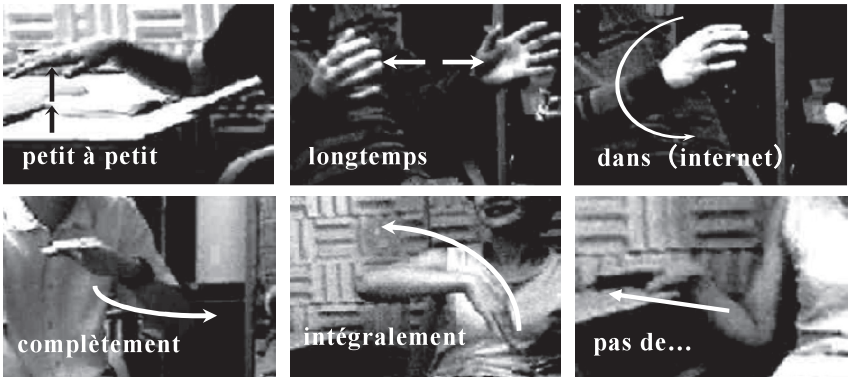
4.1.1.　概念的ジェスチャー



可視世界の概念的要素に対応しているジェスチャーを示す。概念的なもので容易に識別できるのは具象ジェスチャー（iconic gesture）と動作ジェスチャー（kinesic gesture）であろう。前者は談話に表れる事物の形態を直接表現するものであり，後者は「カク ÉCRIRE」，「タベル MANGER」などのように人間や事物の動作や活動を表す。

修飾ジェスチャー（modifier gesture）は，抽象的な概念を視覚的に表す場合に使用される。具象ジェスチャーとの違いを簡潔に言えば，前者は「視

覚的事物」(objet visible) と関係するが，後者は「視覚的概念」(concept visible) を示す。たとえば，「(les gens) normaux 普通の (人びと)」という表現は，ジェスチャーで直接表せないので，「BAS（レベルが）ヒクイ」に置き換えられる。言いかえれば，ジェスチャーは，話者の視覚的印象を位相空間（topological space）に置き換えて，それを視覚的表現モダリティで示している。コーパスを概観すると，この種のジェスチャーは，しばし形容詞や副詞のように，事物や動作を形容する際に使われているようである。たとえば，形容詞や副詞の中で，性質（「grand 大きい」，「petit 小さい」，「dur 堅い」，「différent 異なる」），量（「beaucoup たくさん」，「un peu 少し」），時間（「longtemps 長い間」），仕方，網羅性（「tout すべて」，「complètement 完全に」），近似性（「à peu près だいたい」），空間性（「haut 高い」，「bas 低い」，「dedans 中に」，「dehors 外に」，「à côté 隣に」）などに対応するジェスチャーがこれに相当する。加えて，序数詞（一番目，二番目など）や数詞を示すジェスチャーも修飾ジェスチャーとみなしている。以下にいくつか修飾ジェスチャーの事例を示す。



修飾ジェスチャーの事例

このように，概念的ジェスチャーは，談話に含まれる事物や動作の指示対象に結びついており，視覚情報と言語情報の間には，直接的な対応関係を見出すことができる。

4.1.2.　機能的ジェスチャー

談話ジェスチャーとビートジェスチャーがこの種のジェスチャーに分類され

る。ビートジェスチャーはフランス語で「bâton」とも呼ばれ，形状に乏しい単純な動作である。一般に，話者が談話の一部を強調するときに使用され，時には反復運動をともないながら談話進行にリズムをつける。このジェスチャーは，McNeil（1992: passim）が「superimposed gesture」と呼んだように，他の種類のジェスチャーと混合していることがある。

談話ジェスチャーは，ビートジェスチャーや指示ジェスチャーに比べて，形状がより具象的で，概念的ジェスチャーに近いが，談話に表れる事物や動作の指示対象には，意味上直接的に対応していないことが多い。この種のジェスチャーは，談話マーカーや談話構造，あるいは発話内の力にしばし関連している。たとえば，発話文の最初に表れるジェスチャーは，しばし導入マーカーを表している。「*voilà*, *voici*, *ceci*」などの提示詞（présentatif）のような機能を示しながら，あたかも談話の一部を強調するかのような談話ジェスチャーが見られる。まず，「アタエル DONNER」に似た，聞き手の方へ向ける片手（あるいは両手）のジェスチャー（「提示Ｇ +」）が最も典型的であるが，自分の方へ向けたジェスチャー（「提示Ｇ -」）や下へ向けたジェスチャー（「提示Ｇ±」）も観察される。これらは提示機能を示すことが多く，ここでは「提示ジェスチャー」（geste présentatif）と呼ぶ。

また，楕球体の物体を見せるような談話ジェスチャー（ここでは「具象提示Ｇ」（geste icono-présentatif）と呼ぶ）があるが，これもやはり提示機能を示していることが多い。拒絶や否定を示すことのある「トマレ ARRÊTS」や「マテ ATTENDS」は，文脈により，手の平を聞き手へ向けながら注意を促すことがある（本稿では「喚起ジェスチャー」（geste convocatif）と呼ぶ）。その他，上方に向ける指示対象のない指差しである「談話的指差」（pointage discursif）も，注意喚起のジェスチャーに数えられる。「キル COUPER」のように，手の平を開いて垂直に振り下ろす「切断ジェスチャー」（geste tranchant）は断定や補足を行う文脈で使用される。地中海地方で頻繁に見られる（de Jorio, 1832/2000: 474）OK サインのように，親指と人差し指で丸い円を示すもの（「ラウンドＧ」geste rond）や，2・3 本の指で成る山の形のもの（「ピラミッドＧ」geste pyramid）も注意喚起，断定，強調，提示などを聞き手に示す。

概念的ジェスチャーと比較すると，機能的ジェスチャーは，発話に含まれる概念的情報とは異なる談話の側面を表す。言語情報と対応関係にあるというよりも，聞き手に対して示されているように見えることが，機能的ジェスチャーの特徴であろう。以下にいくつかの事例を挙げる。

4.1.3. その他のジェスチャー

話者の存在する空間の中で，ある特定のものへ向けて方向を指し示すものを，指示ジェスチャーと呼ぶ。「これ・あれ」などの直示や，仮想世界において照応関係を示すものが指示ジェスチャーである。人差し指だけでなく，親指の場合もある。談話ジェスチャーの中には，形態的に近いもの（たとえば，前述した人差し指を上方に向けたもの）があるが，一般に方向の対象が明らかでない限り，指示ジェスチャーには含めない。手の平を差し出して方向を示すことがあるが，談話ジェスチャーとの区別が困難であることから，本稿では指示ジェスチャーに含めていない。また，指示対象がその空間に実存するとは限らない。指示対象は，実際の空間にある場合（déictique concret あるいは définition ostensive）もあれば，空想空間にある場合（déictique abstrait）もある。後者の事例の中に，時間性（DERRIÈRE ウシロで「avant 以前」や「hier

昨日」）を示すこともある（図参照）。本稿では，指で数を数える場合も，指示ジェスチャーに含めている。

慣用ジェスチャーは，特定の共同体において，社会的慣習により意味が与えられたものであり，「emblem エンブレム」（Ekman & Friesen, 1969），「geste quasi-linguistique」（Cosnier, 1982），「quotable gesture」（Kendon, 1992）など，さまざまな名称で呼ばれている。かつては形態と意味の関係が「直接的（概念的）」であったが，現在において恣意的に慣習化したものと言える。しかし，その起源は具象ジェスチャーであることが多い。慣用ジェスチャーには，外国人にも比較的容易に理解されるもの（たとえば，肯定的な評価を示す「いいねジェスチャー」）もあれば，意味が不透明なもの（たとえば，「COCU 寝取られ男」）もある。頻度は談話の種類にもよるが，本研究のコーパスでは1％にも満たなかった。なお，参加者の属する母文化に明らかに由来すると思われる慣用ジェスチャーの場合は，受入社会のジェスチャー文化の観点からの慣用性の不在から，慣用ジェスチャーとは分類しないこととする。

また，発話をためらう際にフィラーを発しながら口の上にあてる人差し指，考えている間の腕組み，あるいは照れながら困った様子を伝える際に頭を掻く行動などは，話者の態度を示す行為と捉えられ，社会相互行為の中である機能を果たしていることが多い（たとえば，聞き手が介入することを遮り，自分の発言ターンを保持する機能など）。これらのジェスチャーは，非言語コミュニケーション研究や異文化間コミュニケーション研究において研究対象とされてきたし，第二言語習得研究でも「会話能力」に言及する場合に取り扱われることがある。本研究では，能弁的な談話を遂行する「談話能力」[11] を分析の中心に据えるため，態度を示すジェスチャーを記述の対象外としている。

4.1.4.　形態的分類における記述上の留意点

本研究において，上記の形態的分類を適用するにあたり，ジェスチャーは，外的形状に純粋に基づいた「本源的コード化」（codage intrinsèque）ではなく，ジェスチャーの解釈に発話文脈を取り込んだ「付帯的コード化」（codage extrinsèque）により記述されている。本源的記述とは，動作の種類や速度あるいは形状を，客観的な指標に置き直すことであり，かつて構造主義者のジェスチャー研究（Birdwhistell, 1952, 1970）において行われた手法であった[12]。

「アタエル DONNER」あるいは「（お金を）ハラウ PAYER」に対応する手振りは，動作ジェスチャーとも提示や強調を示す談話ジェスチャーとも分類できる。発話内容を考慮せずに，形状に即した解釈を行うと，この種の曖昧さが避けられず，話者のメンタル空間の中で起こるプロセスから分析が乖離する。このように，本源的な分類は，動作を行う話者やそれを見て談話を解釈する聞き手の観点から，談話における本来のジェスチャーの機能を把握できないおそれがある。重要なことは，ジェスチャー研究者の形式主義よりも，会話パートナーの視点と音声視覚メッセージの現実的な分析にもとづいた記述である。したがって，本研究では，発話を解釈する言語学同様，ジェスチャー分析者が談話文脈に即した解釈を行う付帯的分類を基本とする。この明確な記述方針は，先行研究に見られなかった点である。

4.2. 動態的類型

ジェスチャーには始まりと終わりがあり，この期間は手の運動により定義される。典型的なジェスチャーは，ボートを漕ぎ進める時のオールの動きのように，「準備期」(preparation)，「ストローク」(stroke)，「復帰期」(recovery) の 3 部分に分けられる（Kendon, 1980）。しかし，ジェスチャーの運動はそれぞれ同一ではない。たとえば，運動が未完で次のジェスチャーに移ることもあれば（partial recovery)，静止画のように，形を保持したまま運動を休止するものもあれば（hold stroke あるいは arrêt sur image)，ひとつのジェスチャー内にストロークが複数ある場合もある（complex stroke)。また，右手と左手が異なる動きである場合や，動き始めがずれている場合は，記述が一層複雑になる。さらに，利き手を考慮するとなると，左右の手の優劣をつけて記述する必要があろう。本研究では，コーパスの判読が無為に複雑になるのを避けるために，利き手や手の左右の情報を記述の中に考慮しないことにする。

Harmant-Dammien（1897）と Kendon（1980）をベースに考案した分類を以下に示す。

1) 単純ジェスチャー（gesticulation simple）
2) 全体ジェスチャー（gesticulation entière）
3) 連続ジェスチャー（gesticulation enchaînée）
4) 複合ジェスチャー（gesticulation complexe）
5) 重複ジェスチャー（gesticulation superposée）

6)　ジェスチャーミス（échec gestuel）
7)　静止画ジェスチャー（arrêt sur image）

4.2.1.　単純ジェスチャー

{準備期 / ストローク / 復帰期}

3 期で構成される典型的なジェスチャーである。一般に発話内容に合った視覚表象を形成するように手が動き出し，静的なストロークとして運動は一時静止し，後に元の姿勢に戻る。一重下線はストロークが静的，つまり手の運動が停止していることを示す。

4.2.2.　全体ジェスチャー

{準備期/ストローク/復帰期} または {ストローク/復帰期} または {ストローク}

動作ジェスチャーや一部の談話ジェスチャーのように，ジェスチャーの意味が手の運動全体で示される場合である。点下線はストロークが動的であることを示す。準備期や復帰期ないこともあるが，単純ジェスチャーと比べてその時間が短く，一般にストロークだけで意味を生成する。

（1）YO-Conv（会話）
030YO：⌊parce que⌋ c'est:M{: NA° TU::re\} c’est +++=
　　だってやはり自然だし
031LN：⌈((低音)) oui\⌉=
　　ええ
032YO：⌊=M{TRAN⌋° QUI::⌈LLE}⌉
　　静かだし

4.2.3.　複合ジェスチャー

{準備期 / ストローク /…/ ストローク / 復帰期}

単独では意味をなさない複数の部分的ストローク（partial stroke）を含むのがこのジェスチャーである。一部の動作ジェスチャーや具象ジェスチャーが

このタイプに属する。たとえば，「四角」と視覚的に表現するとき，垂直線と平行線を示すとすると，2 種類の動作をする必要があるが，本稿では 2 つの独立したジェスチャーとは考えない。

4.2.4.　連続ジェスチャー

{準備期 / ストローク }{ ストローク }…{ ストローク / 復帰期 }

全体ジェスチャーと複合ジェスチャーの間に位置し，独立した同一のストロークが連続して続けられるジェスチャーである。ジェスチャーの繰り返しは談話における強調機能を果たす。単純ジェスチャーと連続ジェスチャーの違いは，ストロークを挟む準備期と復帰期の有無で判断する。

(2) YS-R1b（レシピ理解）：soupe au pistou

039LN：⌊++}⌋ + et::::\ K{on:: écra::se} K{°très} K{°très} K{bien:::/ ++

それから，よくよくよくつぶす

040YS：「((Tv)) n」

うん

041LN：⌊++}⌋((…))

・ÉCRASER ツブス + 反復 = 副詞修飾「très bien」

4.2.5.　重複ジェスチャー

{準備期 /{ ストローク }…{ ストローク }/ 復帰期 }

独立したジェスチャーの中に別のジェスチャーが入れ子状にある場合である。最も多く見られるケースは，ビートジェスチャーとの重複であるが，左右の手で異なるジェスチャーの場合も含まれる。

4.2.6.　ジェスチャーミス

{準備期 }

ストロークが不在な場合である。あるジェスチャーを行う前に，手の動きを

やめることもあれば，別のジェスチャーに切り替える場合もある。これは，文を確定せずに発話する談話能力の高くない話者によく見られるが，ネイティヴにも見られる現象である。この現象を記述することは，話者がどのくらい安定したコミュニケーションを管理しているのかを知る上で有用な指標である。

4.2.7.　静止画ジェスチャー

｛準備期 / ストローク＿＿＿＿ / 復帰期｝または｛準備期 / ストローク＿＿＿＿ / 復帰期｝

動的あるいは静的ストロークの形を，復帰期に入る前に一時的に凍結し，あからさまにその視覚情報を聞き手に提示する時に見られる。これは一種のジェスチャー運動の「アイコン化」と言えよう。ストロークを伴わないジェスチャーミスと混同してはいけない。静止画ジェスチャーは，動態的類型の一つというより，補足的特徴と言うべきであろう。以下の事例では，単純ジェスチャーのストロークが延長されているが，静止画ジェスチャーの特徴が単純ジェスチャーに追加されていると考える。

(3)　YO-R1b：aïoli
169LN：⌊le｛presque⌋:::＼une °　tête＼+++⌈++++++｝⌉
　　ほとんど　あたまひとつ
170YO：⌊une tête⌋
　　あたまひとつ
・相手 YO が反応するまで「アタマ TÊTE」は継続

ここで補足すると，静止画ジェスチャーは，多種多様なジェスチャーに適用される。機能的な観点から，概念的ジェスチャーは，情報伝達をより的確にするという意思によるものが多いが，発言ターンを保持するなどの相互行為的機能を果たすことも少なくない。談話ジェスチャーの場合は後者に限られよう。聞き手の談話理解を管理する，あるいは相互理解を調整するという役割が，静止画ジェスチャーに含まれる。実際，ジェスチャーの静止は聞き手の次の発言まで続くことが多く，語用論的な観点から，ジェスチャーが発話媒介効果（effet perlocutoire）を担うことを示す（Kida & Faraco, 2003）。

ただし，静止画ジェスチャーが上記のような機能を果たすには，具象性を備えている必然性はない。非具象的な静止画ジェスチャーは，情報伝達の意思よりも，発言ターンの保持を暗に伝えるメッセージや，とくに外国人の場合，以下の事例のように，言語的支援（étayage linguistique）の「隠された」要求といった，相互行為的機能を示していることが多い。

(4)　YS-Conv

102YS：((Tv))((haut)) oui/ ++ mais\ [s:::]\ mais::/ y a ^{M}{beaucoup de::::\ ^{B}{[enta:}puliz::::]\} ++ $^{Id?}${[ede::::] ((=aider)) un peu}$^{Id+D?}${::::\ ^{B}{petit\} +^{B}**{petit}::::\ ++ uh:: ++ ^{B}{[ba::dje}-t::]\ ++**
⌈**++++++++**⌉
ええ，でも，でも，多くのキギョウは少しエンジョされている，少ない，少ない，えー，ヨサン

103LN：⌊((Tv)) oui::::\\⌋
ああ

104YS：^{B}{ci-}
シ

105LN：⌈petit budget\\ ((Tv)) oui::\\⌉
少ない予算，そう

106YS：⌊^{B}{ciné}ma ^{Id}{(petit} [by⌋dje}]
少ないヨサンのシネマ

107LN：⌈((TvTv)) oui oui ++⌉
うんうん

この事例で，102 の言語表現「少ないヨサン petit [badjet]」（太字で表現）に付随するジェスチャーは，形状がはっきりしないが，相手が 106 で反応するまで形状を維持したまま続けられている。コーパスには表現されていないが，視線はあからさまに相手へ向けられている。このことから，思い出さない単語を自分の語彙の中で検索しているというよりも，むしろ自信のない単語について援助か再確認の要求（confirmation check）を行っていると考えられる。このように，非具象的な静止画ジェスチャーは，相互行為的方略（stratégie d' interaction）として機能しうる。

この機能は具象ジェスチャーでも果たしうる。次の事例では，その効果を最

大化するために，ジェスチャーの静止を過度に長引かせている（188 の最後から 192 まで太字の部分）。

(5) SA-Conv

188SA：[Id]{et puis:::\ uh::\ [B]{[filto}::r]\ cinq// ++} [S]{c'est très:::}[M]{:\ comment dit/ c'est\uh::\ n:::\ beaucoup} [S]{de +++} [M]**{beaucoup différent de ((Tx))contraste//**

ふぃるた 5 はとてもー，なんていうか，えー，んー，たくさんの，＋＋　とてもちがうのコントラスト

189LN：((Tv)) oui/ +++⌈++⌉

ええ

190SA：　⌊**((Tx)) n::/**⌋

んー

⌈**++++++++++++++++++++++++++++++**⌉

191LN：⌊+ très::\ oui\\ +++ [Id]{contraste\ très très fo::rt\}⌋

⌈oui\ (TvTvTv)⌉

とても，ええ，＋＋＋　とてもとても強いコントラスト

192SA：⌊**((Tv)) ah/ ((Tv)) oui\ oui\}**⌋

あ，　そうそう

193LN：⌈(TvTvTvTvTvTvTv)⌉

194SA：⌊[Id?]{contraste est:::: très}[M]**{très fort**⌋⌈**(TvTv) ++}**⌉

コントラストはとてもとても強い

188 の談話には英語発音や文法的な誤りが含まれ，SA（非ネイティヴ）も自分の発言内容に自信ないように見受けられる。189 で LN（ネイティヴ）は SA のメッセージを理解したようだが，SA はジェスチャーを静止し続ける。加えて，190 に頭をかしげながらフィラー「んー」ととも留保を示し，191 で LN が言い直しで SA の意図の理解を示し，SA が 194 で次のジェスチャーへ移行するまで，静止画ジェスチャーは継続している。尋常でないジェスチャー静止時間と会話パートナーへ向けた強い視線は，ネイティヴの言語的援助を待ち受けていたことを物語る。194 では，2 度のうなずきを伴いながら，同じジェスチャーを静

止せずに，普通の動作でやり直している。

静止画ジェスチャーは，それ自体で相互行為ストラテジーとして機能しうる。これが具象ジェスチャーの場合，談話でコミュニケーション問題になっている要素の可視化により，会話パートナーにとって話者の伝達意志がより明瞭になる。この他，一方の手で静止画ジェスチャーを使い，他の手で別の普通のジェスチャーをする特別なケースもある。本稿で提案されているコーパス表記システムでは，このような視覚モダリティの複雑な関係を示すことはできないが，分析者が映像データをもとに，その都度説明文で示す必要がある。

4.3. 意味的・時間的類型

視覚モダリティによる表現と発話された談話の諸要素を同時に分析すると，両者の間に意味上の関係と時間的な関係（タイミング）の特徴があることが見出される。ここで言うタイミングとは，音声学における構音運動分析で扱われる，ジェスチャー運動と発話における音調単位の中の核（nucleus）の同調のような厳密な時間的関係ではない。むしろ，ジェスチャーの運動と，それに対応する（と思われる）発話された言語表現の開始期を考慮することで，ジェスチャーの同期，先行，遅延などを記述することである。意味的側面に関しては，両表現手段の間にある意味上あるいは談話機能上の重複，補足，代替など関係性を分析することを目的とする。意味的・時間的類型には以下の種類がある。

1) 概念的同期ジェスチャー（synchronie conceptuelle）
2) 機能的同期ジェスチャー（synchronie discursive）
3) メタ談話的同期ジェスチャー（synchronie métadiscursive）
4) 概念的先行ジェスチャー（anticipation conceptuelle）
5) 機能的的先行ジェスチャー（anticipation discursive）
6) メタ談話的先行ジェスチャー（anticipation métadiscursive）
7) 変調ジェスチャー（désynchronie）
8) 無声ジェスチャー（gesticulation sans production verbale）
9) 遅延ジェスチャー（retard gestuel）

4.3.1. 概念的同期ジェスチャー

[談話] xxx xxxxx {xxx <u>対応要素</u> xx}（談話の概念的要素）
[視覚] ジェスチャー（概念的）

あるジェスチャーに対応する談話要素が意味上重複し，両者が同期する場合である。これは，概念的ジェスチャー（具象，動作，修飾）と指示ジェスチャーに限られ，対応する談話要素との同期は，ほとんどの場合この部類に属す。一般に，概念的同期ジェスチャーの機能は，談話のある要素を視覚的に表現することにある。

4.3.2.　機能的同期ジェスチャー

[談話]　xxx { 対応要素 }（談話の機能的要素）
[視覚]　　ジェスチャー（談話機能的）

メッセージの情報に関する部分とは，異なる談話の構造を構成する機能的な要素と同期するジェスチャーの場合である。談話コネクターや一部の不変化詞（たとえば，「donc だから」，否定あるいは疑問表現（「ne...pas ない」...，「non いや」，「sans... なしに」...「quelles... どのような」...，「qu'est-ce que... なに」...，提示表現（「c'est... それは」，「il y a... がある」...，「c'est ça そうです」，「voilà ここにある」，「oui ええ」，など）などの表現の際に，本稿で談話ジェスチャーと分類されているものが同時に使用される。機能的同期ジェスチャーと概念的同期ジェスチャーは言語・視覚レベルでの意味的な同期と言える。

4.3.3.　メタ談話的同期ジェスチャー

[談話]　xxx xxxxx {xxx 対応要素 xx}（談話の概念的要素）
[視覚]　　ジェスチャー（談話機能的）
あるいは
[談話]　xxx xxxxx {xxx 対応要素 xx}（談話の機能的要素）
[視覚]　　ジェスチャー（概念的あるいは指示）

概念的にも機能的にも，意味上の重複が見出されない同期ジェスチャーである。話者は発話と視覚モダリティを通して 2 つの異なる情報を同時に産出し，それらが補足関係にある。メタ談話的同期は，機能的ジェスチャーの際にも概念的ジェスチャーの際にも起こりうる。たとえば，部屋に入ってきた人に対し，椅子へ向けて手の平（談話ジェスチャーの提示 G +）を示して「asseyez-

vous」（お座り下さい）と言う場合や，動作（AJOUTER クワエル）をジェスチャーで示しながら，ことばで項（sucre 砂糖）を発話する場合などに見られるように，異なる発話内容と視覚表現でメッセージ（砂糖を加える）を形成する。機能的ジェスチャーの場合，メタ談話的同期は談話構造の視覚的な特徴付けや，発話内行為の見える化，あるいは単に談話行程への視覚的リズムの付与であることが多い。ただし，談話の中に意味を見出せる概念的同期ジェスチャーとは異なり，メタ談話的同期ジェスチャーは，その意味を明確に示せないこともある。談話内容をヒントにしながら，分析者が視覚表現を付帯的に記述する必要がここにある。なお，情報内容のないビートジェスチャーは，必然的にメタ談話的同期になることを付記しておく。

4.3.4. 概念的先行ジェスチャー

[談話] xxx {xxxxx <u>xxx</u> 対応要素 } xx （概念的要素）
[視覚] ジェスチャー（概念的あるいは指示）

意味上に重複する対応要素が談話内にあるが，ジェスチャーが時間的に先行していることがある。これが概念的ジェスチャーや指示ジェスチャーの場合が概念的先行に相当する。一般に，発話運動に比べて，脳の指令が肢体へ届き実行されるのに時間がかかるので，厳密にいえば，概念的ジェスチャーは，対応する談話要素にわずかばかり先行するが，ここで言う先行ジェスチャーでは数音素分，いわんや一単語分以上のずれがあり，裸眼でも十分確認できるものである。上記の概念図では，談話の対応要素がジェスチャー運動内に共起するように示されているが，運動外にあることもある。

4.3.5. 機能的先行ジェスチャー

[談話] xxx {xxxxx <u>xxx</u> 対応要素 } xx （談話機能的要素）
[視覚] ジェスチャー（談話機能的）

上記の視覚表現の先行が機能的ジェスチャーであり，対応する談話要素が機能的である場合である。概念的先行ジェスチャーと同様，対応する談話要素がジェスチャー運動外にある場合もある。

4.3.6.　メタ談話的先行ジェスチャー

[談話]　xxx {xxxxx xxx 対応要素 } xx　（概念的）
[視覚]　　ジェスチャー（談話機能的）
または
[談話]　xxx {xxxxx xxx 対応要素 } xx　（談話機能的）
[視覚]　　ジェスチャー（概念的あるいは指示）

上記の先行ジェスチャーにおける視覚表現と発話内容が意味上の重複をふくまずに補足し合う場合である。上述の「お座り下さい」（asseyez-vous）と発話する前に手の平で椅子を示す行為は典型的な事例であろう。

4.3.7.　変調ジェスチャー

[談話]　xxx xxxxx {xXX 対応要素 xx}（概念的あるいは談話機能的要素）
[視覚]　　ジェスチャー（概念的，指示，あるいは談話機能的）

変調ジェスチャーとは，視覚・言語モダリティが共起しているにもかかわらず，先行ジェスチャーでもなく，無声ジェスチャーとも遅延ジェスチャーとも取れない，運動が発話行動の韻律的側面に対して不自然な印象を与えるジェスチャーである。この類型は，神経性疾患による運動症状の患者（たとえばパーキンソン病患者）に見られる運動調整の不在に近いが，外国人の場合，外国語の運用能力が低い話者にもしばし見られ，一般に，コミュニケーション意志の言語化プロセスの困難に由来する。概念図は，談話の中の強調の位置（大文字）が対応するジェスチャーのストロークとずれていることを示しているが，コーパスで記述しきれないケースもある。

4.3.8.　無声ジェスチャー

[談話]　xxx xxxxx {++++++++} xx　（対応要素不在）
[視覚]　　ジェスチャー

時間的（先行，同期，遅延）にも意味上（補足，重複）にも対応する要素を談話内に見いだせないジェスチャーの場合であり，ジェスチャーによる言語表現の代替に相当する。談話要素と補足関係にあるジェスチャーが同期しない遅延ジェスチャーや先行ジェスチャーとの間の判定が難しいことがあるが，客観

的な基準がないので，明確な代替性を見極めながら分析者が判断する。

4.3.9. 遅延ジェスチャー

[談話] xxx xxxxx 対応要素 {xxxxxx}
[視覚] ジェスチャー

政治家が演説の中で意識的に発話から視覚表現を遅らせているような場面に遭遇することがあるが，これに相当する。この種のジェスチャーは，視覚表現を強調するかのように，無声の間に行われ，ある種のレトリック的効果を意図して使用される。

5. おわりに

本稿では，外国人によるジェスチャー習得研究を行うにあたり，その理論的な背景を説明した後，実証的に分析行うための方法を提示した。外国人のジェスチャーに習得研究の考えを取り入れて分析することは，第二言語習得研究に理論的に新たな視点をもたらす可能性があることを示した。そのための方法論として，ジェスチャー分析を能弁的談話に限定する必要性を説きながら，付帯的視点でもって分析者がデータを解釈する重要性を示した。実証的にジェスチャー習得を研究するための分析的枠組みとして，形態，動態，意味・時間の3つのレベルでジェスチャーを分類し，各レベルに見られる類型を提案した。外国人によるジェスチャー習得研究は，接触場面で変容する言語やコミュニケーション文化の成立過程や変化の動態を解明するための，一般言語学がひとつのモデルを提示できる可能性を秘めている。これらの研究方法を駆使して，外国人によるジェスチャーの変容を分析することは，次稿の課題としたい。

註

1 « Foreigners talk with their arms and hands as auxiliaries to the voice. The custom is considered vulgar by us calm Englishmen [⋯], you have no need to act [what you are saying] with the hands, but, if you use them at all, it should be very slightly and gracefully, never bringing down a fist upon the table, nor slapping one hand upon another, nor poking your fingers to your interlocutor. Pointing, too, is a habit to be avoided, especially pointing with the thumb over the shoulder, which is an inelegant action. In short, [⋯] you should not be too lively in your actions [⋯]. »

2　この種の記述は枚挙に暇がない。たとえば，大げさな手振りは「外人のようだ」とクインティリアヌスの『弁論家の教育』（紀元 1 世紀中旬，Quintilien, 1979）の中で揶揄されていたし，16 世紀フランスの知識人 Henri Estienne（1578）も，手振りを交えて話すことを「育ちが悪い」，「田舎者」と戒めたばかりか，やはり「外人振る舞い」ともいっているし，17 世紀には，北欧人は南欧人に「猿の手振り」をすると言っていたかと思えば，南欧人は北欧人に「スペイン野郎（Spaniard）」（動じない尊大な様を表す）言い返したものである（Burk, 1992）。19 世紀の哲学者であり劇作家であった Johann Jacob Engel（1785-86）もイタリア人の身振りをみて皮肉を込めて「血の気の多い国民」と形容している。エピグラフにあるイギリス上流階級向け社交教本にも，外国人のように腕や手を使って話すことは「はしたない」とある。

3　19 世紀ドイツの美術史家・考古学者ヴィンケルマン（Johann Joachim Winckelmann）を指し，記述はヘルクラネウム（Herculaneum）に関する（cf. Kendon, 2000a）。

4　« Gestures are hard to classify and it is difficult to make a conscious separation between that in gesture which is of merely individual origin and that which is referable to the habits of the group as a whole. In spite of these difficulties of conscious analysis, we respond to gestures with an extreme alertness and, one might almost say, in accordance with an elaborate and secret code that is written nowhere, known by none, and understood by all. But this code is by no means referable to simple organic responses. On the contrary, it is as finely certain and artificial, as definitely a creation of social tradition, as language or religion or industrial technology. Like everything else in human conduct, gesture roots in the reactive necessities of the organism, but the laws of gesture, the unwritten code of gestured messages and responses, is the anonymous work of an elaborate social tradition. » (Sapir, 1927/54: 556).

5　« [culture] : système relativement cohérent — à la fois du point de vue synchronique et diachronique — des productions symboliques et pratiques d'un groupe humain, historiquement constitué, rassemblé le plus souvent par une territorialité physique. Certaines cultures sont toutefois le fait de populations vivant en "diaspora" ; dans ce cas, leur territorialité est symbolique. » (Vinson neau, 1997: 178).

6　« It has been generally agreed that «gestures», i.e., conventionalized motor symbols, are learned. [⋯] That there is an infinite number of other motor patterns which are socially learned and have social meaning is not so generally accepted. A few of these are regarded as «expressive gestures» and as relatable only to the experience of the particular individuals; most are simply ignored or assumed to be «natural.» It is the experience of the research upon which this paper is based that such a priori judgments are often fallacious » (Birdwhistell, 1952：6). 次の引用文で，ジェスチャーの「学習」プロセスにおける無意識性を強調している：« Kinesics is concerned with the abstraction of those portions of body motion activity which contribute to the process of hu-

man interaction. Much, if not the overwhelming proportion, of such behavior is learned by a number of any society without being aware of the learning process. » (Birdwhistell, 1970: 190-191, sic.).

7 外国人ジェスチャー研究（とくに語彙検索）に関連する論文を挙げる：Morrel-Samuels & Krauss (1992), Feyereisen (1997), Harder & Butterworth (1997), Beattie & Aboudan (1994), Beattie & Coughlan (1998, 1999), Beattie & Shovelton (1999a, 1999b), Butterworth & Beattie (1978)。また，Gullberg (1998a, 1998b), Kendon (2001), Kida & Faraco (2003) は外国人の言語表現とジェスチャー表現との関係に触れている。音声産出と動作の関係を議論したものでは McNeill (1985, 1987, 1989), Feyereisen (1997), Butterworth & Hadar (1989), これを図式化したものに Cosnier & Brossard (1984, p. 26) や Levelt (1989) のモデルにジェスチャーを取り込んだ De Ruiter (2000), Krauss, Chen & Gottesman (2000)。その他 Kendon（2000b, 2001）も参照。

8 アメ＝インディアン（Garrick, 1893; Tomkins, 1929）北米大平原インディアン（Plains Indians）の子孫（Farnell, 1995），オーストラリア･アボリジニ（Roth, 1897; Kendon, 1988）などがある（先行研究は Umiker-Sebeok & Sebeok (1978) に収録）。口承談話の研究にもジェスチャー分析が取り入れられている：中央アフリカのングバカ・マボ人（ngbaka-ma'bo）に関する研究（Derive, 1975），西アフリカのトゥアレグ人（Touaregs）に関する研究（Calame-Griaule, 1977; Calame-Griaule & Barnus, 1980; Barnus & Calame-Griaule, 1981），クィーンズランド州北部のグーグ・イミティル語（Guugu Yimithirr）を話す少数民族に関する研究（Haviland, 1996, 1998, 2000），メキシコ北西部のタラフマラ人（Tarahumara）に関する研究（Copeland, 2000）など。修道院ジェスチャー研究については Umiker-Sebeok & Sebeok（1954）を参照。

9 代表的な研究に以下のものがある。Schegloff (1984), C. Goodwin (1986, 1996, 2000), Heath (1989, 1992), de Fornel (1991, 1993), Streeck (1993, 1994, 1995), Gullberg (1998a), Krafft & Dausendschön-Gay (2001), Kida (2002, 2003, 2008), Kida & Faraco (2003), Faraco & Kida (2008)。Auer & di Luzio (1992) は言語人類学者の論文を中心に収録されている。Kendon (1994) の書評論文も参照。

10 たとえば Creider（1978, 1986），Guaïtella（1995, 1998, 1999），Nobe（1998），McClave（2000）の研究がある。Lhote & Llorca（2001）はマルチモーダルモデルの言語教育への応用を試みている。

11 第二言語習得研究において，「談話能力」（compétence discursive）は談話の結束性や一貫性に関する規則や談話ジャンル（物語，論説など）特有のマーカーの知識であり，言語文法に関する「言語能力」（形態統語，語彙，発音など）と並んで「伝達能力」（compétence de communication）（Hymes, 1984）の一部とされる。「会話能力」（compétence conversationnelle または internationnelle）は，ある共同体における社会相互作用の規範に対して適切なやりとりを維持するのに必要な能力（間合い，談話連鎖の組み立て手順，会話ターンの交替など）を示す（cf. Kida, 2005）。

12 身振り手振りを分節可能な単位，つまり「動素」（kinem）レベルまで記述され

たが，一般の談話分析や会話分析を行う上では煩雑すぎたため，行われなくなった。

参考文献

Abercrombie, David (1955). Gesture. *English Language Teaching*, 9：3-12 (再録：Chapitre VI, In David Abercrombie, *Problems and principles in language study*. London, Longman, 1973).

Abercrombie, David (1968). Paralanguage. *British journal of disorders of communication*, 3：55-59 (再 録：In John Laver, Sandy Hutcheson (Eds.), *Communication in face to face interaction: Selected readings*. Harmondsworth (UK), Penguin：64-70, 1972).

Argyle, Michael (1967). *The psychology of interpersonal behavior*. London, Penguin.

Argyle, Michael (1969). *Social interaction*. London, Methuen.

Argyle, Michael (1975). *Bodily communication*. London, Methuen/New York, International University.

Aster, Jane (1860). *The habits of good society: A handbook for ladies and gentlemen*. New York, G. W. Carleton & Co. (From the last London Ed.).

Auer, Peter & di Luzio, Aldo (Eds.) (1992). *The contextualization of language*. Amsterdam-Philadelphia, John Benjammins.

Bange, Pierre (2006). Les conditions internes et externes de l'apprentissage des langues étrangères. In Faraco (Ed.), pp. 47-70.

Barnus, Edmond & Calame-Griaule, Geneviève (1981). Le geste du conteur et son image. *Geste et image*, 2：44-68.

Beattie, Geoffrey W. & Aboudan, Rima (1994). Gestures, pauses and speech: An experimental investigation of the effects of changing social context on their precise temporal relationships. *Semiotica*, 99 (3/4)：239-272.

Beattie, Geoffrey W. & Coughlan, Jane (1998). Do iconic gestures have a functional role in lexical access? An experimental study of the effects of repeating a verbal message on gestures production. *Semiotica*, 119 (3/4)：221-249.

Beattie, Geoffrey W. & Coughlan, Jane (1999). An experimental investigation of the role of iconic gestures in lexical access using the tip-of-the-tongue phenomenon. *British journal of psychology*, 90：35-56.

Beattie, Geoffrey W. & Shovelton, Heather (1999a). Do iconic hand gestures really contribute anything to the semantic information conveyed by speech? An experimental investigation. *Semiotica*, 123 (1/2)：1-30.

Beattie, Geoffrey W. & Shovelton, Heather (1999b). Mapping the range of information contained in the iconic hand gestures that accompany spontaneous speech. *Journal of language and social psychology*, 18：438-462.

Birdwhistell, Ray L. (1952). *Introduction to kinesics*. Louisville, University of Louisville Press.

Birdwhistell, Ray L. (1970). *Kinesics and context: Essays on body motion communication*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.

Boas, Franz (1891). Sign language (Second general report on the Indians of British Columbia, Sixth report of the committee, appointed to investigate the North-Western tribes of the dominion of Canada). In *Report of the sixtieth meeting of the British Association for the Advanced Science (1890)* (再録: Umiker-Sebeok & Sebeok (1978), pp. 19-20).

Boas, Franz (1966). Gestures. In Helen Codere (Ed.), *Kwakiutl ethnography*. Chicago, The University of Chicago Press : 372-376 (再録 : Umiker-Sebeok & Sebeok (1978), pp. 21-25).

Bolinger, Dwight (1946). Thoughts on 'yep' and 'nope'. *American speech*, 21 (2) : 90-95.

Bolinger, Dwight (1980). Accents that determine stress. In Key (1980), pp. 37-48.

Bouissac, Paul (1973). *La mesure des gestes*. The Hague, Mouton.

Bouissac, Paul (2010). *Semiotics at the circus*. Berlin/New York, Mouton de Gruyter.

Bouissac, Paul (2012). *Circus as multimodal discourse: Performance, meaning, and ritural*. New York, Continuum.

Bouvet, Danielle (2001). *La dimension corporelle de la parole. Les marques posturo-mimo-gestuelles de la parole, leur aspects métonymiques et métaphoriques, et leur rôle au cours d'un récit*. Paris, Peeters.

Bouvet, Danielle & Morel, Mary-Annick (2002). *Le ballet et la musique de la parole : le geste et l'intonation dans le dialogue oral en français*. Paris-Gap, Ophrys.

Burke, Peter (1992). The language of gesture in early modern Italy. In Jan Bremmer & Herman Roodenburg (Eds.), *A cultural history of gesture*. Ithaca (NY), Cornell University Press : 71-83.

Butterworth, Brian & Beattie, Geoffrey W. (1978). Gesture and silence as indicators of planning in speech. In Robin N. Cambell & Phillip T. Smith (Eds). *Recent advances in the psychology of language 4: Formal and experimental approaches*. New York-London, Plenum Press : 347-360.

Butterworth, Brian & Hadar, Uri (1989). Gesture, speech, and computational stages: A reply to McNeill. *Psychological review*, 96 (1) : 168-174.

Buyssens, Éric (1956). Le langage par gestes chez les moines. *Revue de l'Institut de sociologie* (Université de Bruxelles), 29 : 537-545 (再録 : Umiker-Sebeok & Sebeok (1987), pp. 29-37).

Calame-Griaule, Geneviève (1977). Pour une étude des gestes narratifs. In Geneviève Calame-Griaule (Ed.), *Langage et cultures africaines. Essais d'ethnolinguistique*. Paris, François Maspero : 303-359.

Calame-Griaule, Geneviève & Barnus, Edmond (1980). Il gesto del narratore e la sua immagine. *La ricerca folklorica*, 2 (Antropologia visiva la fotografia) : 15-25.

Calbris, Geneviève (1989). Analyse sémiotique. In Geneviève Calbris & Louis Porcher, *Geste et communication*. Paris, Hatier-CREDIF, LAL：45-223.

Calbris, Geneviève (1990). *The semiotics of French gesture* (tr. par Owen Doyle). Bloomington (IN), Indiana University Press.

Calbris, Geneviève (2002). Sémantisme des connecteurs：nuancement du verbal par le gestuel. *Lidil*, 26 (numéro thématique：Gestualité et syntaxe)：139-153.

Calbris, Geneviève (2003). *L'expression gestuelle de la pensée d'un homme politique*. Paris, CNRS éditions.

Cavé, Christian, Guaïtella, Isabelle & Santi, Serge (Eds.) (2001). *Oralité et gestualité. Interactions et comportements multimodaux dans la communication*. Paris, L'Harmattan.

Condillac, Etienne Bonnot (Abbé de) (1746). *Essai sur l'origine des connoissances humaines (ouvrage où l'on réduit à un seul principe tout ce qui concerne l'entendement)*. Amsterdam, Pierre Mortier (1798 年の修正現代版：Paris, Vrin, 2002).

Condon, William S. (1980). The relation of interactional synchrony to cognitive and emotional processes. In Key (1980), pp. 49-65.

Condon, William S. (1984). Une analyse de l'organisation comportementale. In Jacques Cosnier & Alain Brossard (Eds.), *La communication non verbale*. Paris-Neuchâtel, Delachaux et Niestlé：31-70 (traduction par Véronique Reymond de：Analysis of behavioral organization. *Sign language studies*, 13：285-318, 1976).

Condon, William S. & Ogston, William D. (1966). Sound film analysis of normal and pathological bahavior patterns. *Journal of nervous and mental diseases*, 143 (4)：338-347.

Condon, William S. & Ogston, William D. (1967). A segmentation of behavior. *Journal of psychiatric research*, 5：221-235.

Condon, William S. & Ogston, William D. (1971). Speech and body motion synchrony of speaker-hearer. In David L. Horton & James J. Jenkins (Eds.), *Perception of language. Proceedings of a symposium of the learning research and development centre, University of Pittsburgh*. Columbus (OH), Charles E. Merrill (A Bell, Howell Company)：150-173.

Contento, Silvana (1998). Forme et fonction du geste pour la cohésion discursive. In Santi, Guaitella, Cavé, Konopczynski (Eds.), pp. 589-594.

Contento, Silvana (2002). De l'élaboration du mot à la production des phrases et du discours：gestes et gestualité coverbale. *Lidil*, 26：125-137.

Copeland, James E. (2000). The grammaticalization of lexicalized manual gesture in Tarahumara. In David G. Lackwood, Peter H. Fries & James E. Copeland (Eds.), *Functional approaches to language, culture and cognition. Papers in honor of Sydney M. Lamb*. Amsterdam-Philadelphia, John Benjamins：427-393.

Cosnier, Jacques (1982). Communications et langages gestuels. In Jacques Cosnier, Alain Berrendonner, Jacques Coulon & Catherine Orecchioni, *Les voies du langage. Communications verbales, gestuelles et animales*. Paris, Dunod : 255-304.

Cosnier, Jacques & Brossard, Alain (1984). Communication non verbale : co-texte ou contexte ? In Jacques Cosnier & Alain Brossard (Eds.), *La communication non verbale*. Neuchâtel-Paris, Delachaux et Niestlé : 1-29.

Creider, Chet A. (1978). Intonational tone groups and body motion in Luo conversation. *Anthropological linguistics*, 20 : 327-339.

Creider, Chet A. (1986). Inter-language comparisons in the study of the interactional use of gesture. *Semiotica*, 62 (1/2) (Special issue: Approaches to gesture) : 147-164.

de Fornel, Michel (1991). Gestes, processus de contextualisation et interaction verbale. *Cahiers de linguistique française*, 12 : 31-50.

de Fornel, Michel (1993). Sémantique et pragmatique du geste métaphorique. *Cahiers de linguistique française*, 14 : 247-253.

de Jorio, Andrea (1832) *La mimica degli antichi investigata nel gestire napoletano*. Naples, Fibreno (Giuseppe Cocchiar の前書き付き第二版 : Naples, Associazione Napoletana per i Monumenti e il Paesaggio, 1964 ; réimpression anastastique de l'édition originale : Bologna, 1979 ; Adam Kendon の英訳 : *Gesture in Naples and gesture in classical antiquity*. Bloomington and Indianapolis, Indiana University Press, 2000).

De Ruiter, Jan Peter (2000). The production of gesture and speech. In McNeill (2000), pp. 284-311.

Derive, Jean (1975). *Collecte et traduction des littératures orales. Un exemple négro-africain : les contes ngbaka-ma'bo de RCA*. (Langues et civilisations à tradition orale, 18) Paris, SELAF (Société d'études linguistiques et anthropologiques de France).

Diderot, Denis (1749-51). *Lettre sur les aveugles, à l'usage de ceux qui voient.* ; *Lettre sur les sourds et muets, à l'usage de ceux qui entendent et qui parlent*. London [Paris, Durand]/Paris (Marion Hobson, Simon Harvey の解説による現代版 : Paris, Flammarion, 2000).

Efron, David (1972). *Gesture, race and culture: A tentative study of some of the spatio-temporal and "linguistic" aspects of the gestural behavior of Eastern Jews and Southern Italians in New York City, living under similar as well as different environmental conditions*. The Hague, Mouton (初版 : *Gestures and environments*. New York, King's Crown Press, 1941).

Ekman, Paul & Friesen, Wallace V. (1969). The repertoire of nonverbal behavioral categories: Origins, usage, and coding. *Semiotica*, 1 (1) : 49-98 (再録: Kendon, 1981, pp. 58-105,).

Engel, Johann Jakob (1785-86). *Ideen zu einen Mimik*. Berlin, Auf Kosten des Verfassers und in Commission bey August Mylius (仏語訳 : *Idées sur le geste*

et l'action théâtrale. Paris, H.J. Jansen et Comp, 1795；現代ファクシミリ版：Genève, Slatkine Reprints, 1979).

Estienne, Henri (1578). *Deux dialogues du nouveau langage françois italianizé et autrement desguizé, principalement entre les courtisans de ce temps*. Genève, P.-M. Smith (P. Ristelhuber の解説付き現代版：Genève, Slatkine, 1980).

Faraco, Martine (Ed.) (2006). *La classe de langue : théories, méthodes, pratiques*. Aix-en-Provence (France), Publications de l'Université de Provence.

Faraco, Martine & Kida, Tsuyoshi (2008). Some remarks on gesture in second language classroom. In Steve McCafferty & Gale Stam (Eds.), *Gesture. Second language acquisition and classroom research*. London/New York, Routledge：280-297.

Farnell, Brenda (1995). *Do you see what I mean? Plains Indian sign talk and the embodiment of action*. Austin (TX), University of Texas Press.

Ferré, Gaëlle (2002). Les pauses démarcatives déplacées en anglais spontané：marquages prosodiques et kinésiques. *Lidil*, 26：155-169.

Feyereisen, Pierre (1997). The competition between gesture and speech production in dual-task paradigms. *Journal of memory and language*, 36 (1)：13-33.

Fónagy, Ivan (1983). *La vive voix. Essais de psycho-phonétique*. Paris, Payot.

Freedman, Norbert (1975). Toward a mathematization of kinesic behavior: A review of Paul Bouissac's *La mesure des gestes*. *Semiotica*, 15：299-334（再録：Kendon (1981), pp. 151-164,).

Goffman, Erving (1967). *Interaction ritual: Essays of face-to-face behavior*. Garden City (NY), Anchor Books/Doubleday, Co. Inc..

Goffman, Erving (1974). *Frame analysis. An essay of the organization of experience*. New York, Harper Colophon Books.

Goodwin, Charles (1986). Gestures as a resource for the organization of mutual orientation. *Semiotica*, 62 (1/2)：29-49.

Goodwin, Charles (1996). Transparent vision. In Elinor Ochs, Emanuel A. Schegloff & Sandra A. Thompson (Eds.), *Interaction and grammar*. Cambridge (UK)-New York-Melbourne, Cambridge University Press：370-404.

Goodwin, Charles (2000). Action and embodiment within situated human interaction. *Journal of pragmatics*, 32：1489-1522.

Guaïtella, Isabelle (1995). Mélodie du geste, mimique vocale ? *Semiotica*, 103 (3/4): 253-276.

Guaïtella, Isabelle (1998). Réitération et énumérations：approche des fonctions discursives et interactives de l'intonation. *Faits de langues*, 13：150-156.

Guaïtella, Isabelle (1999). Rhythm in speech: What rhythmic organizations reveal about cognitive processes in spontaneous speech production versus reading aloud. *Journal of pragmatics*, 31 (4)：509-523.

Gullberg, Marianne (1998a). Gestures and speech in second language interaction. In Santi, Guaitella, Cavé & Konopczynski (Eds.), pp. 641-645.

Gullberg, Marianne (1998b). *Gestures as a communication strategy in second lan-*

guage discourse: A study of learners of French and Swedish. Lund (Sweden), Lund University Press.

Hadar, Uri & Butterworth, Brian (1997). Iconic gestures, imagery, and word retrieval in speech. *Semiotica*, 115 (1/2) : 147-172.

Harmant-Dammien (1897). *Du geste artistique dans l'action oratoire*. Abbeville,C. Paillart.

Haviland, John B. (1996). Projections, transpositions, and relativity. In John J. Gumperz & Stephen C. Levinson (Eds.), *Rethinking linguistic relativity*. Cambridge (UK), Cambridge University Press : 271-323.

Haviland, John B. (1998). Guugu Yimithir cardinal directions. *Ethos*, 26 (1) : 25-47.

Haviland, John B. (2000). Pointing, gesture spaces, and mental maps. In McNeill (2000), pp. 13-46.

Heath, Christian (1989). Goffman, la notion d'engagement et l'analyse des interactions en face à face. In *Le parler frais d'Erving Goffman*. Paris, Minuit : 245-256.

Heath, Christian (1992). Gesture's discret tasks: Multiple relevancies in visual conduct and in the contextualisation of language. In Auer & di Luzio (Eds.), pp. 101-128.

Hymes, Dell H. (1984).*Vers la compétence de communication*. Paris, Hatier-CREDIF.

Juven, Philippe & Colletta, Jean-Marc (2002). Peut-on parler de gestualité argumentative ? À propos de la gestualité pratique dans l'interaction de vente. *Lidil*, 26 : 171-188.

Kendon, Adam (1980). Gesticulation and speech: Two aspects of the process of utterance. In Key (1980), pp. 207-227.

Kendon, Adam (1988). *Sign language of aboriginal Australia: Cultural semiotic and communicative perspectives*. Cambridge (UK), Cambridge University Press.

Kendon, Adam (1992). Some recent work from Italy on quotable gestures ('emblems'). *Journal of linguistic anthropology*, 2 (1) : 92-108.

Kendon, Adam (1993). Human gesture. In Kathleen R. Gibson & Tim Ingold (Eds.), *Tools, language and cognition in human evolution*. Cambridge (UK), Cambridge University Press : 43-62.

Kendon, Adam (1994). Do gestures communicate? A review. *Research on language and social interaction*, 27 (3) : 175-200.

Kendon, Adam (2000a). Andrea de Jorio and his work on gesture. In Andrea de Jorio, *Gesture in Naples and gesture in classical antiquity*. Bloomington and Indianapolis, Indiana University Press (Adam Kendon の 英 訳 : *La mimica degli antichi investigata nel gestire Napolitano*. Naples, 1832).

Kendon, Adam (2000b). Language and gesture: unity or duality? In McNeill (2000), pp. 47-63.

Kendon, Adam (2001). Gesture as communication strategy. *Semiotica*, 135 : 191-209.

Kendon, Adam (2004). *Gesture. Visible action as utterance*. Cambridge (UK), Cambridge University Press.

Kendon, Adam (Ed.) (1981). *Nonverbal communication, interaction, and gesture*. The Hague-Paris-New York, Mouton.

Key, Mary Ritchie (Ed.) (1980). *The relationship of verbal and nonverbal communication*. The Hague-Paris-NewYork, Mouton.

Kida, Tsuyoshi (2002). Rôle cognitif et social des indices visibles dans la négociation du sens en situation de contact. *Travaux interdisciplinaires de parole et langage d'Aix-en-Provence* (TIPA), 21 : 87-100.

Kida, Tsuyoshi (2003). Le rôle de l'information visuelle dans la compréhension discursive en L2. *Marges Linguistiques*, 5 : 260-285.

Kida, Tsuyoshi (2005). Effects of teacher's discourse on learners' discourse: A study of interaction in the second language classroom. In Alex Housen & Michel Pierrard (Eds), *Investigations in instructed second language learning*. Berlin/New York, Mouton de Gruyter : 457-495.

Kida, Tsuyoshi (2006). Réflexions sur les observables : définitions du geste. In Faraco (Ed.), pp. 93-110.

Kida, Tsuyoshi (2008). Does gesture aid discourse comprehension in second language? In Steve McCafferty & Gale Stam (Eds.), *Gesture. Second language acquisition and classroom research*. London/New York, Routledge : 131-156.

Kida, Tsuyoshi & Faraco, Martine (2003). Gestures in second language discourse: metacommunicative function and perlocution. In Rector, Poggi & Trigo, pp. 305-318.

Kida, Tsuyoshi & Faraco, Martine (2004). La prédication discursive et son rapport avec le geste et l'intonation. Communication présentée au colloque « Prédication », 4-6 novembre 2004, Université de Provence, Aix-en-Provence.

Kida, Tsuyoshi & Faraco, Martine (2009). La prédication gestuelle. *Faits de Langues*, 30-31 : 217-226.

Kida, Tsuyoshi & Faraco, Martine (2011). Aspect gestuel de l'aspect : effets de l'interlangue sur la préposition française. Communication présentée au Colloque «Prépositions et aspectualité», Université d' Aix-Marseille 1 (Aix-en-Provence, France), 2 juin 2011.

Kleiber, Georges (1998). Sens, référence et existence ; que faire de l'extra-linguistique? *Langages*, 127 : 9-37.

Krafft, Ulrich & Dausendschön-Gay, Ulrich (2001). La multidimensionalité de l'interaction. Textes, gestes et le sens des actions sociales. *Marges linguistiques*, 2 : 120-139.

Krauss, Robert M., Chen, Yihsiu & Gottesman, Rebecca F. (2000). Lexical gestures and lexical access: A process model. In McNeill (2000), pp. 261-283.

Levelt, Willem J.M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. Cambridge

(MA), Bradford/MIT Press.
Lhote, Élisabeth & Llorca, Régine (2001). Le geste, outil d'écoute. In Francis Carton (Ed.), *Oral : variabilité et apprentissage*. Paris, Hachette (*Le français dans le monde*, « Recherches et applications ») : 160-164.
Mallery, Garrick (1893 [1894]). *Picture-writing of the American Indians* (10th Annual report of Bureau of American Ethnology 1888-1889). Washington D.C., Bureau of American Ethnology, The Smithsonian Institution, Government Printing Office, 2 volumes (現代版 : Mineola (NY), Dover Publications, 1972).
Maury-Rouan, Claire (2002). Mimiques, regards et activités discursives. In Guy Barrier & Nicole Pignier (Eds.), *Sémiotiques non verbales et modèles de spatialité*. Limoges (France), Presses Universitaires de Limoges : 63-75.
McClave, Evelyn Z. (2000). Linguistic functions of head movements in the context of speech. *Journal of pragmatics*, 32 : 855-878.
McNeill, David (1985). So you think gestures are nonverbal? *Psychological review*, 92 (3) : 350-371.
McNeill, David (1987). So you *do* think gestures are nonverbal! Reply to Feyereisen (1987), *Psychological review*, 94 (4) : 499-504.
McNeill, David (1989). A straight Path-to where? Reply to Butterworth and Hadar. *Psychological review*, 96 (1) : 175-179.
McNeill, David (1992). *Hand and mind: What gestures reveal about thought*. Chicago, Chicago University Press.
McNeill, David (2001). Growth points and catchments. In Cavé, Guaïtella & Santi (Eds.), pp. 25-33.
McNeill, David (Ed.) (2000). *Language and gesture*. Cambridge (UK), Cambridge University Press.
McNeill, David & Levy, Elena T. (1993). Cohesion and gesture. *Discourse processes*, 16 (4) : 363-386.
Morel, Mary-Annick (2004). Intonation, regard et genres dans le dialogue à bâtons rompus. *Langages*, 153 : 15-27.
Morel, Mary-Annick & Bouvet, Danielle (2001). Les réalisations formelles de la coénonciation : cooccurrence et distribution des indices des trois plans : morphosyntaxique, intonatif, posturomimogestuel. Cavé, Guaïtella & Santi: 482-486.
Morel, Mary-Annick & Khaldoyanidi, Anna (2004). Prédication et focalisation. Propriétés intonatives des relatives prédicatives. Communication présentée au colloque « Prédication », 4-6 novembre 2004, Université de Provence, Aix-en-Provence.
Morrel-Samuels, Palmer & Krauss, Robert M. (1992). Word familiarity predicts the temporal asynchrony of hand gestures and speech. *Journal of experimental psychology: Learning, memory and cognition*, 18 (3) : 615-622.
Mounin, Georges (1973). Une analyse du langage par gestes des Indiens (1881). *Semiotica*, 6 : 154-162.
Müller, Cornelia (2003). On the gestural creation of narrative structure: A case

study of a story told in a conversation. In Rector, Poggi & Trigo (Eds.), pp. 259-276.

Nobe, Shuuichi (1998). Synchronie between gestures and acoustic peaks of speech: across-linguistic study. In Santi, Guaitella, Cavé & Konopczynski (Eds.), pp. 543-548.

Paradis, Michel (2000). Awareness of observable input and output — not of linguistic competence. Paper presented at the conference Odense University, Denmark, 28 April 2000.

Quintilien (1979). *Institution oratoire. Vol. 6 : livres X et XI*. Paris, Les Belles Lettres (Jean Cousin による仏訳，編集，解説).

Rector, Monica, Poggi, Isabella & Trigo, Nadine (Eds.) (2004). *Gestures: Meaning and use*. Porto (Portogal), Edições Universidad Fernando Pessoa.

Roth, Walter E. (1897). *Ethnological studies among the North-West-Central Queensland Aborigines*. Brisbane (Australia), Edmund Gregory, Government Printer/London, Queensland Agent-General Office (第 1 章 « The expression of ideas by manual signs: A sign-language », pp. 71-90 が Umiker-Sebeok & Sebeok (1978) に収録 , pp. 273-301).

Ruesch, Jurgen & Kees, Weldon (1956). *Nonverbal communication. Notes on the visual perception of human relations*. Berkeley (CA), University of California Press.

Santi, Serge Guaitella, Isabelle, Cavé, Christian & Konopczynski, Gabrielle (Eds.), *Oralité et gestualité : communication multimodale, interaction*. Paris, L'Harmattan.

Sapir, Edward (1927). The unconscious patterning of behavior in society. In E. S. Dummer (Ed.), *The unconscious: A syposium*. New York, Knopf：114-142 (再録：David G. Mandelbaum (Ed.), *Selected writings of Edward Sapir in language, culture and personality*. Berkeley (LA), University of California Press：544-559, 1954).

Schegloff, Emanuel A. (1984). On some gestures' relation to talk. In J. Maxwell Atkinson, John Heritage (Eds.). *Structures of social action*. Cambridge (UK), Cambridge University Press：266-296.

Siblot, Paul (1998). Nomination et production de sens：praxème. *Langages*, 127：38-55.

Streeck, Jürgen (1993). Gesture as communication I. Its coordination with gaze and speech. *Communication monographs*, 60 (4)：275-299.

Streeck, Jürgen (1994). Gesture as communication II: The audience as co-author. *Research in language and social interaction*, 27 (3)：239-267.

Streeck, Jürgen (1995). On projection. In Esther N. Goody (Ed.), *Social intelligence and interaction. Expressions and implications of the social bias in human intelligence*. Cambridge (UK)-New York-Melbourne, Cambridge University Press：87-110.

Tomkins, William (1929). *Universal Indian sign language of the Plains Indians of North America*. London/San Diego, Boy Scout World Jamboree (現代版：New

York, Dover Press, 1969).
Umiker-Sebeok, D. Jean & Sebeok, Thomas A. (Eds.) (1954). *Monastic sign languages*. Berlin-New York/Amsterdam, Mouton de Gruyter.
Umiker-Sebeok, D. Jean & Sebeok, Thomas A. (Eds.) (1978). *Aboriginal Sign Languages of the Americas and Australia*. (Volume 1: North America: Classic comparative perspectives ; Volume 2: The Americas and Australia). London/New York, Plenum Press.
Vinsonneau, Geneviève (1997). *Culture et comportement*. Paris, Armand Colin.
Winkin, Yves (2001). *Anthropologie de la communication : de la théorie au terrain*. Bruxelles. Paris, Seuil (Bruxelles, Éditions De Boeck Université, 1996).
木田剛（2012）「百聞は一見にしかず」－日本人フランス語学習者による L2 談話理解と視覚情報の関係について．『文藝言語研究・言語編』第 61 巻（筑波大学大学院人文社会科学研究科）：103-145

付録：コーパス表記法

++	：ポーズ（“+”＝約 0.1 秒）
-	：発話の途切れ
::	：音の延長（“:”＝約 0.1 秒）
/ (//)	：上昇イントネーション（終止的）
( )	：下降イントネーション（終止的）
MOt	：強勢イントネーション
na°ture	：ピッチの移行（記号の後）
(mot)	：聞取り困難な発話（括弧内はコーパス作成者の推測）
[aaa]	：簡易発音記号
((低音))	：コーパス作成者のコメント
>aaa<	：高速発話
a:a:a:	：低速発話
HA-HA-HA	：笑い
「aaa⌉⌊aaa」	：発話の重複（オーバーラップ）
{aa̲a̲}	：ジェスチャー周期（下線 = ストローク）
(Tv)	：頭の動作，Tv/Th は垂直 / 平行首肯，Tx はこれ以外の動き “()”は発話と独立，“(())”は発話内に重複
(C)	：特異な身振り
(F)	：顔の表情（Fs は笑顔，Fscl は眉の顰め）
Ic	：具象ジェスチャー（iconic gesture）
K	：動作ジェスチャー（kinesic gesture）
M	：修飾ジェスチャー（modifier gesture）
B	：ビートジェスチャー（beat gesture）
Id	：談話ジェスチャー（ideographic gesture）
D	：指示ジェスチャー（deictic gesture）
E	：慣用ジェスチャー（emblem）
S	：ジェスチャーミス（slip of hand）